とある魔術の禁書目録――異伝：『古の鍵』編

ダイちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある魔術の禁書目録――異伝：『古の鍵』編

【Ｎコード】
Ｎ２２４９Ｐ

【作者名】
ダイちゃん

【あらすじ】
ローマ正教とイギリス清教が襲われた。
燃える大聖堂の中、ローラ＝スチュアートの前で笑みを浮かべる男の真意とは……
今……戦場は学園都市に移された。
魔術と科学が交差する中で、上条当麻はその右手に全ての想いを乗せて行く。
その幻想をぶち壊す為に――

第一話――――胎動（前書き）

どうも、ダイちゃんと申す者です（やはり名前がハズいｗ）
とある魔術の禁書目録・とある科学の超電磁砲の二次創作は初めてになります。
設定など不備があればお申し付け下さい。
オリは敵キャラになります。ので、ちょっと主人公チートとは違うかも知れません。まぁ主人公は基本チートっぽい人達ですけど。
小説・漫画・アニメと、一応私自身は楽しんでいますが、今回は何処に基準を置こうかと考えまして、結果、アニメを基準に考えました。
コレは、原作を読んでいるけどアニメは見ない人でも話は分かるだろうけど、アニメは見るけど原作は分からないと言う人が多いかな？と考えたのと、ソレとは別に最大の理由は……原作は登場人物が多過ぎて、しかもすいません、私にとって皆が魅力的で外せなく、しかも話のスケールが大き過ぎるのでコッチの腰が抜け引けてしまいます。第四次大戦でも書くしかなくなっちゃうｗｗ
と、言う訳で、話の基準は本日２０１０年１１月３０日現在のアニメ放送、『セカンドシーズン第８話以前』、及び『超電磁砲の全話』の設定を起点と致します。
アックアＬＯＶＥである！や、提督最高！、レッサー可愛いよレッサー……の感想は私の作では使えませんのでご了承下さいｗ
また、前提をそうしましたので、その中で登場されている者の細かい紹介は省きます。プロット変更が無い限り、ココから先の人間の登場はありませんので、アニメの知識があれば結構かと思います。
原作ブレイク！が嫌な方は回れ右をお願いします。二次創作・分岐的なモノですので、ご了承の上、出来ましたらお付き合い、よろしくお願いします。

第一話――――胎動

第一話――――胎動

「……くっ！　誰か！　誰か居りませんのっ」
「無駄だ、ローラ＝スチュアート」
「くっ」
イギリス清教最大主教（アークビショップ）・ローラ＝スチュアートの表情は苦悶と怒りに満ちていた。そしてその身は床に横たわり、片腕を突いて身を起こすのがやっとである。
今、イギリス清教の大聖堂は炎に包まれていた。それは全て――
「……何故です……何故っ！　貴方程の方がっ、こんな真似を行いたるのですかっ！」
――人の世界とは決別した筈の一人の男の所業だった。
「御答え下さいっ！　錬金術師パラケルススっ！」
ローラの視線の先に、燃えさかる大聖堂の十字架の前で見下ろす、若い男の姿が在った。
テオフラストゥス・フィリップス・アウレオールス・ボンバストゥス・フォン・ホーエンハイム。ソレが人で在った頃の名。錬金術を極め、人としての死を越えて世界の在り様と共に成った者。

ソレが何で有ったのか……ソレは誰にも分かりはしないが、彼が彼自身の持つ命題の解答に辿り着いた時、彼は全ての世界と決別した。五百年以上の時を経て生きる、伝説の錬金術師だった。

「汝と逢うのは四十年振りか。相も美しいな、ローラ＝スチュアート」

まるで昼下がりの穏やかな一時の様に、パラケルススは微笑む。だが、今、ソレは適当では無い。

「その久方振りの再会たるが、この様な惨劇の中でありたるは何故です！」

「ふむ。いや、少し探し物をな。此方の前にはローマに出向いたのだが、どうやら一足違いで汝の元に有ると言うのでな。こうして参った次第さ」

「ローマ？　……まさかローマ正教も」

彼であれば容易い。誰であろうと何であろうと

「面白い者達も居たが、まぁ撫でた程度だ、直ぐに動ける様になるだろう」

「そんな」

「驚く事は無い、ローラ＝スチュアート。我が何者であるか、汝は知っているだろう。悲しむべきは、現教皇が我を知らなんだ事か……いや、実に悲しむべき不幸だな」

ぞくり、と背中を走るモノがある。

「殺したるとのコトね？」

「その必要は有るまい、無知は罪では無い。罰は必要だがね」

彼にとってはどうでもいい事なのだと理解する。誰人も、何事も、彼の興味は惹かない。その彼が

「ココには貴方の欲したるモノ等、なにもあらずでしょう」

「いや、そうでも無い……ん？」

「っ！」

壇上に、一人の白衣の老人が現れる。

「貴方は誰です！」
ローラの声など耳に入らぬかの様に、男はパラケルススに小声で言葉を話せば
「ふむ……ローラ＝スチュアート」
「！」
意識をパラケルススに戻す。彼の言葉は集中して聞かねばならない。何処に彼の目的が隠れているか分からないから。
「どうやら我の望むモノの一つは手に入った様だ。いや、お邪魔したな、ローラ＝スチュアート」
「何をっ！」
言うローラの目に飛び込んで来たのは筋骨隆々の大柄な一人の男。その脇に――
「オルソラ＝アクィナスっ！」
――オルソラを抱えていた。だらりと下げた手足を見るに気を失っている様だ。
「彼女をどうする積りたるのですか！」
叫ぶローラの眼前で天井が崩れ落ちパラケルスス達に降り注ぐ……前にソレは弾け飛ぶ。
「！」
現れた壮年の男はその刀を納刀し大男の傍に控える。
「このっ！」
立ち上がり手を振り上げようとした刹那「っ！」悲鳴を上げる間も無く吹き飛ばされる。
「っかは！」
扉に叩き付けられた時、ソレが何時の間にか壇上にいる凶眼を光らせる男の風撃だと知る。
「悪いけど～、ちょ～っとジッとしててね～」

え？　と思えば、目の前に立った黒髪の女

「くあっ！」

気が付けば、自分の手足が扉に縫い付けられていた。その四本の剣が血肉を貫通してドアに突き刺さる。

礫にされた痛みの中で目を開けば、パラケルススの背後の瓦礫が不自然に動き出し、やがて荘厳な扉へと姿を変えた。

その扉が開けば眩い光が満ちている。その中に白衣の老人が入り、次々に人が光に消えていく。そして最後にパラケルススが入る前に、ふ、と振り返り

「最後に教えてやろう、ローラ＝スチュアート」

「な　　にを」

もうろうとする意識の中で確かに聞いた。彼、パラケルススは言った。

「　　」

パラケルススが扉に消えれば、扉は再び瓦礫と化した。

大聖堂中で行われた惨劇。多数の死傷者を出し聖堂は炎上した……ローラは、ローマとイギリスを蹂躙したあの錬金術師が次に向う場所を思い浮かべた。

確証は無い。だが確信は持てた。あの白衣はあの都市の者達を思い起こさせる。そして現れ囲んだ者達から魔力は感じなかった。であれば、アレは超能力だろう。この事件にアチラ側の人間が混ざっているのなら、事件の帰結する先は想像に難くないだろう。全てはアソコへ――

「学……園都市……禁　　しょ　　もく　　ろく」

――ローラ＝スチュアートは、彼の最後の言葉を噛み締めながら、その意識を手放したのだった。

――――我は神をこの手に掴む……戯れとしては中々であろう？――――

◇　◇　◇

「とうま！　とうま！　早く行かないと売り切れるんだよ」
「んな焦んなくても限定五百個の特性バーガーが売り切れるかよ。っつか、五百個を限定扱いする神経が上条さんには分かりませんがね」
　確かに同感な意見を疲れた様に洩らす上条当麻ではあるが
「む～。じゃあじゃあとうまは、ハンバーガーを五百個食べる人が現れないと言い切れるの」
「言い切れるな」
「絶対に絶対言い切れるのかな！」
「あぁ！　絶対の絶対言い切れるね！」
　当麻の絶対の発言に気を良くした小柄なシスター、インデックス。もう鼻歌交じりでニコニコと当麻の前を歩いていたのだった。猫の

スフィンクスを抱き上げくるくる回るその姿に、当麻も心がどこか和んでいたのだが

「……嘘だ……こんな……」

「……」

それは悪夢の看板だった。

「そんな……開店後たったの三時間だと言うのに」

「……」

それは『五百個限定特性バーガーは完売致しました』と書かれた、本当に悪夢の様な看板が上条当麻の目の前に在った。

「と〜〜う〜〜ま〜〜」

地獄の底から響いてくるかの様な声色に

「な、なんでせうか、インデックスさん」

ギ……ギ……ギ……と音が聞こえそうな程ぎこちなく振り返れば

――女神の様に神々しい光を背負い祈りを捧げるシスターが居た。

「天に召します我等の神はその広い御心で全ての事を許すんだよ。でも私はまだ修行中の身だから全ての事は許せないかもだけど、それでも言い残す事が有れば聞くだけは聞いてあげても良いんだよ」

一応、当麻は祈ってみる。せめてこの死星（シスター）の怒りがそれほど深くは無い事を……無理だと思うが……

「あ〜〜……また今度埋め合「とうまーーーーーっ！」ぐあああああっ！」

まさに怒り心頭の白い獣は当麻の頭に思い切り噛み付いたのだった。

「不幸ーーーだーーーー」

いつもと同じ日常を過ごす上条当麻とインデックスは、知らない。
自分達の直ぐ傍に、笑みを零す者の接近を……

「ーーーーー見つけた」

まだ、知らなかったのだった。

第一話――――胎動（後書き）

敵キャラとして出たパラケルススは実在しました。昔の錬金術師の名前ですね。
ま、こんな化物みたいな人ではありませんので、あくまで架空の同姓同名と捉えてください。

第二話――――遭遇（前書き）

書き始めなので、少しペースを上げてみます。

書いてて思いましたが、なんか連載アニメの劇場版の様な感じに思えてきました（ワンピースの映画を見たせいか？）

そんな感じに捕らえてくれると読み易いかも知れません。

第二話――――遭遇

第二話――――遭遇

「なにやってんのよ、アンタ達」
「へ？」「んふぇ？」
突然掛けられた声に当麻と当麻に噛み付いているインデックスが振り向けば

「ビリビリ」
「短髪」
「御坂美琴よっ！」
学園都市、二百三十万の中で七人しか居ない最高位（レベル5）。その第三位と呼ばれる女子中学生、御坂美琴がソコに居た。

「ったく、いい加減名前くらい覚えなさいよね」
と言ったはいいが
「んじゃ美琴」
んがっ！　と真っ赤に染まってしまうあたりは意外に分かりやすい。
「ななななな馴れ慣れしいのよコノ馬鹿！」
「……不幸だ」
相も変わらずの理不尽をその身に謳歌しつつ、それでも一応聞こうと思う。
「で？」

「な、なによ」
「俺になんか用ですか？」
ソレを聞きたいのだったが
「べ、別に偶々見掛けたから声掛けただけで……別にアンタを探してたって訳じゃないんだけど、その……だから！」
ただ何となく顔でも見れるかな～なんてフラフラ街をうろついてたとは言えない彼女は、最初の目的を思い出した。そう
「なにやってんのよ、アンタ達」
「贖罪（おつとめ）」「ふぇんばふ（天罰）」
「あぁ……そ」
ガジガジ噛み付いてるインデックスと、そのままコッチを見詰める上条当麻に、やっぱり話しかけるんじゃ無かったかな、と思い始めた美琴だった。

◇　◇　◇

ビルの上からその光景を眺める人影。その背後に現れた者は
「配置完了です。異常はありません」
「わかった。気を抜くなよな」
「はい」
消えた影に目を配り、再び視線を戻す。どうやら禁書目録（インデックス）は上条当麻の頭から離れた様だ。いつもいつも賑やかなモノだと笑みが零れる。だが――
「だからこそ護らねばならんのよな。我等が受けた借り、返してお

かねばアノ方の重荷にも成りかねんのよ」
　その長大な剣を担ぎ、天草式十字凄教の建宮　斎字は姿を消すのだった。

◇　◇　◇

「んふふ～～～～♪」
「はぁ」
　何とか安めのハンバーガーを十個購入する事で矛を収めたインデックス。両手一杯のハンバーガーにご満悦の様子だ。既に口に咥えているのは四個目になる。
「にしても良く食べるわねー」
「妖怪喰っちゃ寝とはコイツの事だからな」
「ふ～ん」
　そんな感想が耳に入った様だ。まさに心外だ！　と言わんばかりに振り向けば「もがが、もものもむ「喰うか喋るかどっちかにしろっ」……」喰うらしい。
　やがてゴクンと呑み込めば。
「とうまがキチンと朝ご飯をくれないのがイケないんだよっ！」
　彼女なりの反論らしい。
「ちゃんと喰ったじゃねぇか！　カップラーメンをすする上条さんの目の前でバクバクバクバクと大量に！」
「足りないんだよっ！　第一とうまはいつも学校で美味しい物食べてるんだから、お家で食べる時くらい私にトンカツ位くれてもバチはあたらないんだよ」
「朝からトンカツとか有り得ない食事を要求するんじゃねぇよ」
「とうまにはあのトンカツの美味しさが分かって無いんだよ」
「いや、だから美味しいとか美味しくないとかじゃなくてだな。俺

が言いたいのは「ちょっと待ってっ！」！　なんだ？　ビリビリ」
わなわなと震える美琴を不思議に思う二人だったが、
「アンタ達、朝食って……なんで一緒に朝ご飯、ごは、朝ご、ごごは」
「「？」」
暫く美琴の言動が理解出来なかったが、やがて「「！」」と閃いた。
あ、不味いな～、と思った当麻が「いや、た」またま朝飯を一緒に食べたんだよ、と説得力ゼロの説明をしようとするのにかぶせて――
「？　一緒に暮らしてるんだもん、一緒に朝ご飯は食べるでしょ？　この国は違うのかも？」
――普通に言った。

言い切った。

「……あぁ～……御坂さん？」
真っ白になってる御坂美琴に恐る恐る問い掛ける当麻だったが、既に準備は出来ていた。そう、全力で……
「……この……こ、のっ！」
逃げ出す準備は整えていたのだった。

「ロリコンがーーーーーっ！」
「なんなんですか一体ーーーー！」
電撃を撒き散らして御坂美琴は逃げる上条当麻を負い掛けて行くのだった。

「え～……と……あ、とうまーーー」
あまりの事態に頭が追いつかなかったインデックスが、ようやく我に返った時には既に二人の姿は無かった。
「もうっ！　何処行っちゃったんだよ、とうまー」
駆け出すインデックスの、しかし行く先は決まってはいないのだった。

◇　◇　◇

「ったく、何で俺がこんな真昼間っから出歩かなきゃなんねんだよクソったれが」
そのキツイ視線で手当たり次第威嚇しながら街を歩く白髪に色素の薄い肌の少年。そんな少年の怒気を全く気にせずにコロコロカラカラ笑顔を振りまく少女。
「だって早く行かないと限定五百個の特製ハンバーガーが売り切れるかも知れないってミサカはミサカはアナタを少し急かす口調で言ってみたり、って幾ら言っても急がないから半分位は諦めの気持ちも混ざって焦って言ってみたり、ってミサカはミサカは睨んでみたり」
「売り切れねぇよクソガキ」
「あーー！　もしかしたら五百個食べる人が先にお店に行ってしま

ったらどうするの？　ってミサカはミサカはアナタの思慮の無さにがっかりしてみる」
「そんなアホな設定を思慮に入れる必要ねぇよアホが」
「む～～」

白い少年は一方通行（アクセラレータ）と呼ばれる、学園都市二百三十万の頂点に君臨する第一位の最強能力者（レベル5）。
少女は打ち止（ラストオーダー）めと呼ばれる、約一万人の御坂美琴のクローン、妹（シスターズ）達の上位個体。

凄惨な実験や取り返しの付かない過去と引き換えに、今こうして二人で歩く一時を得た。慌しくけたたましい打ち止（ラストオーダー）めにはいつもいつも辟易するが、それでもこんな時間をどこか楽しんでいる自分に、一方通行（アクセラレータ）は戸惑いを隠せない。だけど結局の所は――

「良いから前見て歩きやがれ。転んで怪我してりゃ喰いモンどころじゃなくなんぞ」

――こんな日常は悪くない。そう、思う。

「うふふ。大丈夫だよ～ってミサカはミサカはもう一回くるりと回ってみ」と言っている傍から、ドンッ！　とぶつかり転がった。
「うわっ！」
「きゃっ！」
後ろ向きに歩いていた打ち止（ラストオーダー）めに上条当麻を探しながら走っていたインデックスが派手にぶつかったのだった。どちらも小柄なのだが、流石にインデックスの方に体格の差が出た。
「あ、ごめんね！　とうまを探してたから前を見てなかったんだよ。怪我とかしてない？」
「うん！　私も後ろ見て歩いてたからゴメンなさいってミサカはミ

サカはすんなり自分の非も認めてみたり。ってアリガトウ、とミサカはミサカはアナタに差し出された手を掴んでみる」
「ふふ、怪我がなくてよかったんだよ」
こうして、二人の少女、禁書目録（インデックス）と打ち止（ラストオーダー）めは出会ったのだった。

そして……

「ったく、だから前見て歩けっつってんだろがクソガキ」
「う〜〜、ちょっと油断しただけだもん！　てミサカはミサカはなんでもない事を主張してみる」
「ごめんね、私が余所見してたのがイケなかったんだから、この子を責めないでほしいんだよ」
「あ？」
何時の間にか自分が悪者になっている気がする。なんだが打ち止（ラストオーダー）めに似た空気を醸し出す少女に
「ったく。別に責めてねぇだろうが」呆れてしまう。だが、どこかやっぱり、こんな日常も悪くないかと思ってしまう。

一体いつから自分はこんな腑抜けになったのか……そう、この小さな同居人と暮らすようになってから？　……いや、出会った時からだろうか……いや、でももしかしたらもっと前。そう……アイツと出会ったあの夜から、なのかも知れない。
脳裏に浮かぶ顔と声、そしてあの、右拳の痛み。あの男は確か――
「あっ！　とうまっ！」

インデックスが一方通行（アクセラレータ）の背後に向い手を振り声を上げた時――

「居た居た。ったく、何処行ってたんだよお前」

「何言ってんのよ！　アンタが突然走り出すからはぐれたんでしょうがっ」

「はぁ？　ってかソレがビリビリ撒き散らして追い掛け回した御方のセリフですか」

「あんですってーー」

「もう！　いい加減にして欲しいんだよっ、二人とも」

「あっ！　アレはお姉さまでは無いですか、ってミサカはミサカは初めての出会いにドキドキしてみたり」

「へ？　ミサカって、アンタ」

――上条当麻と御坂美琴は現れた。笑顔で並ぶ禁書目録（インデックス）と打ち止め（ラストオーダー）の居る場所へ。そして……

「……逢いたかったぜぇ？　……三下ぁぁぁ！」

「っ！　てめぇは」

「一方通行（アクセラレータ）っ！」

幻想殺し（イマジンブレーカー）・一方通行（アクセラレータ）・超電磁砲（レールガン）・禁書目録（インデックス）・打ち止め（ラストオーダー）

全ての運命が交差する時、物語は始まる……ソコに近付く一台の車の中で上がる「あは～、見～つけたっ♪」の声と共に――

――加速度を増して――

第二話――――遭遇（後書き）

今後一つ、改変。
一方通行の障害設定はナシで行こうと思います。（ラストオーダーは無傷で助けたと云う形で）
好きなキャラですので、やはり存分に動かしてあげたいのです。て、出番の範囲ですけどｗ
すいませんが、ご容赦下さい。

第三話――――介入

「なんでお前が」
上条当麻は言いながらも状況を分析しようと頭を巡らせる。
彼の背後のインデックスは状況を把握しているとは思えない。御坂美琴は？　自分以上に驚いている様に見える。インデックスの傍に居る少女は、どこかミサカ妹を幼くした感じに見えるが、自分の知る妹達（シスターズ）は中学生位の背格好の筈だ。誰も彼も……そして――注意を一方通行（アクセラレータ）に戻してみれば

トン。と彼が足を踏み鳴らした時、

「なっ！」
地面が一気にひび割れ砕かれ、土石の波のなって当麻に襲い掛かったのだった。
「ひゃっはーーー！」
凶悪に歪んだ笑みの中で一方通行（アクセラレータ）は相手の反撃を楽しみに待つ。
が、ソレは望んだ者ではなく
「このっ！」
「！　ビリビリ？」
当麻の前に躍り出た御坂美琴は電磁場を放出して土砂から砂鉄を操り出し、土石の波を防いでいた。
「ちっ！　邪魔すんなよオリジナルが」
「アンタ……こんな人気の多い場所で何考えてんのよ！」
確かに周囲には沢山の人が居、今は突然の能力者同士のバトルに逃げ惑っていた。

「あぁ？　知らねぇよ。俺はそのツンツン頭の三下に用があんだからよ。テメェは引っ込んでろ」
「舐めんじゃないわよっ！」
思わず額から電気を発するが
「……どけ」
「あ……」
殺意を少し、見せた。
それだけでどこか竦んでしまう。かつて感じた絶望的なまでの力の差は、今尚歴然と残っているのだ。どう足掻こうと、自分では彼には勝てない。傷一つ、付けることは叶わないと理解する。頭ではなく、体の、心の、魂の奥底で……理解してしまう。
「テメェ」
立ち竦む美琴の肩に手を置き、一歩前に出る。
「インデックスとその子をどうする積りだ」
「あぁ？」
上条当麻は拳を握り締める。
護ると決めた……インデックスを……
護ると約束した……御坂美琴と彼女の世界を……
ソレを果たす為なら、上条当麻は何度でも戦う事を躊躇わない。学園都市最強だろうがなんだろうが、拳を握って一歩を踏み出すことを躊躇う積りは無い。そんな当麻の意志を感じたのだろう。
「……そうこなくちゃな」
一方通行（アクセラレータ）もまた獰猛な笑みを浮かべて身をかがめる。殺しでも制圧でも蹂躙でも無い……戦いが出来る相手は彼には多くは存在し無

い。そんな数少ない存在のウチの一つが、自分の前で拳を握っている。不思議と零れる笑みすらも意に介さずに、その殺意が黒く染まっていく。

そんな、二人の間の空間が歪んで見えるかの様な緊迫感の中、中央に割って入ったのは小柄なシスターと小さな少女。

「ちょ！　とうま！　別にインデックスはこの人に何もされてないんだよ！」

「もう！　何でもかんでも暴力に訴えるのは良くないよ！　ってミサカはミサカはアナタの単細胞っぷりに哀しくなってみたり」

間に割って入る二人の視線に思わず

「え？　ってお前」

「んだよクソガキ」

と戸惑ってしまう。お互い、この二人を巻き込んでの諍いなどは望むべくもなく、その存在を前にしては殺気も怒気も抑えるしかなくなってしまう。

その――――――間隙。

「え？」あ？」は？」

御坂美琴と一方通行（アクセラレータ）、上条当麻は思わず目を疑う。疑った……何時の間にか、背中合わせに立ち争いを治めたインデックスと打ち止（ラストオー）め（ダー）の、まさにその真ん中に、一人の男が舞い降りた。

静かに小さく音を立て舞い降りた男は――

「わりぃな」

――言ってインデックスと打ち止めを両脇に抱え再び大きく跳んだ。

「な！」

「風使い？」

驚く当麻と美琴の前で、男は一台の黒いワンボックスの傍に降り立つ。すかさずドアが開くと中には数人の人影が見えた。二人を攫う積りなのは明らかだった。だが、そうはさせないと当麻が駆け出すよりも早く。美琴がコインを構えるよりもずっと早くに、飛び出したのは

「てぇぇめぇーーーー！」

怒涛の勢いで飛来する一方通行の狂気があった。

自分の目の前で、自分の手元から、打ち止めを奪う？　それは、彼には容認出来る筈も無い、ちっとも笑えない命知らずな冗談だった。

頭には一つの未来しか浮かばない。

殺す。殺して、取り戻す。そして……殺す。ただそれだけの事だ。そんな殺意を漲らせて飛来する一方通行に対し男は

「うぜぇなー……ほらよっ」

「なっ！」

簡単に打ち止めを一方通行目掛けて放り投げたのだった。

まるでボールでもパスするかの様に投げられた打ち止めを、それでもしっかり抱き留め様とした瞬間――

――トスッ――「あ……ん……だとぉ？」

打ち止めのわきの下から、まるで針の穴を通す様に伸びた一本の

刀が、一方通行(アクセラレータ)の胸に突き刺さり背中からその紅く染まった切っ先を晒していた。
何時の間にか、先の男とは違う男が、打ち止め(ラストオーダー)の背後に浮かんでいた。その壮年の男は静かに
「この子を傷つけない為に反射を切るは良し……だが敵前にて無防備を晒すは迂闊」
或いは服を手で掴めばそれで良かったのかも知れない。だが目の前に放り投げられた打ち止め(ラストオーダー)が猛スピードで突進する自分に反射される事態を瞬時に考えた一方通行(アクセラレータ)は、反射を切って打ち止め(ラストオーダー)を受け止める事を選んでしまった。その僅かコンマ何秒の無防備を、相手はまさに突いてきた。
男はそのまま打ち止め(ラストオーダー)を小脇に抱え、一方通行(アクセラレータ)を地面へと蹴り落す。その反動で再び車へと跳ぶが

「させるかっ！」
美琴の砂鉄が男を囲む。このまま動きを封じて打ち止め(ラストオーダー)を取り返す。その思惑が成ったと思った瞬間

「え？　ちょ！」
男の姿は打ち止め(ラストオーダー)と共に消え、見れば車のドア前に降り立っている。
「空間移動能力者(テレポーター)！」
打ち止め(ラストオーダー)を車に詰め込み、自分も乗り込む。
「させないっつってんでしょ！」
今度は電撃を放った美琴だったが
「あ～ん。ごめんね～～」
黒髪の女性が助手席から何本かの棒の様な物を空にばら撒けば、美琴の電撃がそれ等に引かれてしまった。
「なっ！　誘雷針！」

カラン、と音を立てて落ちる数本の誘雷針を残して、黒いワンボックスカーは遠ざかっていったのだった。

「そんな……」

思わず膝を折る美琴の横で

「くそったれが！」

インデックスと打ち止め（ラストオーダー）を攫った奴等に、なによりも何も出来なかった自分自身への憤りを隠せない上条当麻が、傍の自動販売機を思い切り殴りつけていたのだった。

◇　◇　◇

「……なんの用だ？」

「とぼけるな、アレイスター」

学園都市統括理事長・アレイスター＝クロウリーの前に、土御門元春は立っていた。格好はいつもの緩い装いだが、その表情はいつになく厳しい物だ。

「既にイギリスとローマは動き出そうとしている。二つを襲った連中がこの都市に侵入しているのはお前も掴んでいるはずだ」

「ソレがどうかしたのかね」

逆さまに浮かんだアレイスターは全く慌てた様子は無い。

「分かってるのか貴様。このまま行けばイギリス清教とローマ正教、二つの勢力と正面から戦（コト）いを構える事にも成りかねないぞ！」

「はて？　魔術側（そちら）を襲った犯人が科学側（こちら）に入り込んだからと云って、何故に我々が非難を受ける必要が有るのかな？」

それはソッチの問題だ、と意に介さない。だが土御門は一枚の写

真を取り出し指で弾く。
床に落ちた写真を見て
「……ほう」
アレイスターもまた興味を持つ。ソレはイギリス清教の大聖堂。炎に燃える大聖堂の中で笑う一人の白衣の老人が写し出されていた。
「問題は科学側に犯人が入り込んだ事じゃない……犯人の中に科学側の人間が居る事だ」
不意に背を向け歩き出す土御門は
「俺は今回は動けん。最悪、全てのケースは吹き飛ぶぞ？　アレイスター」
土御門が消え、再び無人と成った部屋で、写真をもう一度見詰める。

「生きていたのか……木原幻生……」

老人はかつて、学園都市に居た科学者だった。

第四話――――到来

「おいっ！　しっかりしろっ」
胸元から血を流す一方通行（アクセラレータ）を抱き抱えた当麻だったが、抱えた主は何の反応も示さず、ただ自分の手が彼の血に染まるだけだった。
「くそっ！　おいビリビリ！　タクシー止めろ。救急車待ってちゃ間に合わねぇ。いつも行ってる病院が近い、その方が速い」
「ちょ！　アンタ何してんのよ」
自分のシャツを脱いで一方通行（アクセラレータ）の体に巻き付ける。刀で貫かれた傷の止血方法など知る由も無いが、包帯代わりに巻き付ける事位はした方が良いと思った。そんな当麻の行動に戸惑う美琴。彼女にとって一方通行（アクセラレータ）は、憎むべき相手であり救うべき相手じゃない。ソレは当麻も同じだと思っていた。妹達（シスターズ）の為に、自分の為に、傷だらけになりながらも戦ってくれたのは、他ならぬ上条当麻自身なのだから。
「そんな奴の止血なんかどうでも良いからアイツ等を追わな！　な、なによ」
「本気で言ってんのか、てめぇ」
「ば！　だってソイツはっ！」
間違ってはいない筈の自分に向けられたのは、上条当麻の鋭い視線だった。
「もういい……タクシー！」
「ちょ、ねぇ……ちょっと」
美琴を無視して止めたタクシーのドアが開けば、当麻は「待ってて」と言って一方通行（アクセラレータ）の元へ「待ちなさいよ！」と、遮る美琴の脇をすり抜ける。
「アンタねぇ！」

「……別に……お前にコイツの事を許せとか、あの実験の事を全部水に流せとか……そんな無茶苦茶な事は言わねぇよ」
「だったら」
「でもな」
手を肩に回し支える様に立ち上がった当麻は振り返り
「二人を取り返そうとして傷を負ったコイツを助けるのを邪魔するってんなら……先ずはテメェをぶちのめす」
「……」
強い視線と言葉と共に、彼女を通り過ぎた。
「なんでよ……」
「……悪いな」
当麻にも分かってはいる。おそらくは彼女の判断と言動は、客観的に見て理解出来、許容出来る範囲の至極正常なモノだと思う。だが――
――ソレではキリが無い。ただ当麻はそう思うだけだった。
環境・状況・時期、或いは流れ。もしかしたらその時の気分と云うモノだって有るかもしれない。この世の中の全ての事象の中で、善悪の境界線とは酷く曖昧なモノに感じられて仕方が無い。上条当麻にとって、ソレは明確に白黒に分れている物ではなかった。
自分と戦い敵対した者は悪なのか？　ならばその敵に与した者も全て悪なのか？
やがて自分とその者とが共通の敵を持った時、悪と共に悪を討つのか？　構わず全てを悪として、全てに牙を突き立てるのか？

ソレではキリが無い。
ソレでは果てが無い。

もしかしたらこの世界のどこかには明確に線の引かれた書が在るのかも知れない。真理が書かれた石碑が埋まっているとは考えられないか？　全てを知り語る語り部が存在しないと言い切れるか？

否定に足る解答を持ち合わせては居ない。だが、肯定出来るほど、自分の目は遠くを見れはしないし手は長くない。

だったら、と上条当麻は考える。
自分と同じ目線の者を、近しい者とは見れないだろうか？　その者の守りたいものを自分も守りたいと思えたなら、その手を取るのは難しいのか？　自分の守りたい者を守りたいと言う者と並び立つ事は？

それはきっと難しくない。それはきっと世界を平和にする解答とはかけ離れている答えだろうとは思う。それでも自分を含めた小さな世界は守る事が出来るかも知れない。
要する自分は、世界の平和や人類の恒久的繁栄などには興味は無い。目の前にある小さな平和が、目の前にある危機から守れればそれで良いのだ。ソレが車に引かれて終わろうとしてるなら止めようと思う。ソレが地球がひび割れて終わろうとしているなら阻止する為に戦おうと思う。
一方通行（アクセラレータ）はかつて妹達（シスターズ）を虐殺した。彼女達を守りたくて、敵対し戦った。ソコにソレ以上の意味は無い。
今、打ち止め（ラストオーダー）とインデックスを救おうとして一方通行（アクセラレータ）は怪我を負った。自分が守りたい者を守ろうとして傷を負った者を助けたいと願い動く。ソコにソレ以上の理由は必要無い

「あの実験を止める為にコイツを殺したとしても俺は後悔なんかしねぇよ。けどな……アイツ等を助けようとしたコイツをココで死なせたら、俺は絶対後悔する。悪いな、御坂」
「……」
後部座席に一方通行（アクセラレータ）を押し込め
「病院迄急いでくれ」
「ちょ！　お客さん、困りますよ！　怪我人だったら救急に」
運転手としては大迷惑だ。血だらけの怪我人など、シートは汚れるは死なれても目覚めが悪い。なによりも厄介事この上ない。はっきり言って関わりあいに成りたく無いのだが
「コッチのほうが速いんだ！　頼むよ！」
「勘弁してくれ、面倒は」ごめんだ。そう言う矢先、激しい雷光がフロントガラスを横切った。
恐る恐る横を見てみれば

「グダグダ言ってないでさっさと車を出しなさい……次は当てるわよ」

新しいコインを指に乗せ俯く、御坂美琴の姿が在った。

「ひ、わ、わかりました」
「お前」
慌ててドアを閉める運転手はそのまま猛スピードで走り出した。
「お前はこれから如何するんだ」と言った当麻の言葉を遮って。
走り出した車を眺め、「勝手にしなさいよ……ばか」俯き、零す。

自分は間違ってはいなかったと思う。ただ、彼とは考えが違ったことは分かった。どちらがどうとか、今は何も分からない。ただハッキリしている事が一つ有る。

上げた顔には……怒り。
「何処のドイツか知らないけど……ふざけんじゃないわよーー！」
美琴は黒いワンボックスを目指し駆け出した。何処に逃げても見つけると意を固める。このモヤモヤの原因は、全部あの二人を攫った連中が悪いのだと、その怒りの矛先に目掛け駆け出したのだった。

◇　◇　◇

「や～っと大人しくなったわね～」
「ったく、やかましぃぜガキ」
黒いワンボックスカーの中に、先程まで大音量で喚いていた二人の少女の声はもうしない。どうやらようやく観念したと云った所だろう。今では最後尾で後ろ手に縛られたまま大人しく横たわっている。
「で～？　これからど～するの～、ヴィンセント。魔法使いの旦那のトコ？」
「……いや」
助手席の女、アネイア・シーリングに運転席に座る大柄な男。ヴィンセント・シュヴァルツは答える。
「依頼人（クライアント）が動いている。合流して回収する」
「あっそ～。でも～、な～んか今回の依頼ってメンドいよね～。依頼人（クライアント）が二人なんて～」
「良んじゃね？　アチラさんが揉めない限りはどうって事ねぇよ」
「ま～、スロウは趣味だしね～、荒事」
「うっせーよ」
スロウの凶眼すらもアネイアは気にしない様だ。そんな空気の中、後部座席に静かに座る不破は自らの刀に手を掛け
「……っ！　ヴェンセント！」

「っ！」
まるで示し合わせたかの様にヴィンセントは車を急停止させる。
その直後、激しい斬激が車道を横切る。
「んだよ？　うぜーな」
スロウの纏う空気が険悪なモノに変わる。そんな中
「ふ～ん……囲まれちゃった～」
「さて、どちら側だと思う？　不破」
「現状分析に余念が無いのは重畳……なれどソレを怠りし包囲は愚策。どちらであろうと……」
ヴェンセントに答え不破は後部ドアを開け外に出――
「意に介さず」――その刀を抜刀するのだった。

続いてスロウも車を降り、アネイアは助手席の窓を開け、その身をドアにもたれさせる。そんな一同の周囲に、ぞろぞろと人影が現れる。その手に各々武器を持っている天草式十字凄教。そして……

「悪いが禁書目録ともう一人の娘の身柄、コチラに引き渡して貰いたいのよな」
長大な剣を肩に乗せた建宮が、一歩前に踏み出てきた。ソレを聞けば分かる。
「禁書目録……ならばお前達は魔術側（アチラ）と言う訳か」
「あ～ん。お姉さんとしては～、あんまり子供が虐められるのは見たくないかな～……出来れば通して欲しいんだけどな～」
ヴェンセントとアネイアの声にその剣を突き出し
「お前達が何者であれ、禁書目録は渡すわけにはいかんのよな」
「なんだ、お前等もあのガキ欲しいのかよ」
「借りがあるのよな」
一斉に、周囲の者達が獲物を手にする。
「へー、だったら？」

「……是非もなし」
「うふふ。恐いわ～……ね～」
スロウと不破の闘気も増し、アネイアの笑みに闇が影を落とす。
「禁書目録と上条当麻にはデカイ借りが有るのよ。我等天草式、二人の為、ひいてはあの方の為にも……ココは譲れんのよなぁ！」
建宮の剣が魔力を帯びたを合図に、一斉に天草式は闘気を増す。戦いを一気に終わらせる覚悟を見せる。
「くくくく……おもしれぇな、テメ「待て」ら？　んだよ不破ぁ」
邪魔をするな。そう言いたげなスロウをして征するのは
「俺がやろう」
「！　ヴィンセント」
「……ソレも由し」
車から出て来たヴィンセントがゆっくりと歩み、スロウは纏った風を解き、不破は剣を収める。自分達は必要ない。それ程の信頼が、彼には在った。
「何人でも構わんのよな。我々はただ……戦うだけよ！」
一斉に、その剣を振るい突進する天草式を前に、ヴィンセントただ……
「悪いが……仕事なんでな」
哀しげに目を細めるだけだった。
◇　◇　◇

ソコはとある施設だった。いつもと同じ昼下がり、いつもと同じ笑い声、いつもと同じ日常の中に……木山春生の姿が在った。
多くの、チャイルドエラーと呼ばれる置き去りにされた子供達と共に、この学園都市で共に暮らし、毎日を過ごしている。かつての実験で失った子供達の笑顔を取り戻し、もう二度と手放さないと誓った。今では、幾つかの特許で得た資金を使い、多くの子供達と共に過ごせる施設を開設、自らその陣頭と成り中心と成って、バタバタと慌しい。されど充実した……毎日。
幼年組が施設の庭で遊んでいるのを眺めていると、
「木山先生！」
「ん？」
子供に一人が自分を呼ぶ。また何か、不可解なモノでも見つけたのだろうか？　もしくは行動を思いついたのか……どこまでも子供と云う存在は自分の想像を超えてくるものだ。そんな子供達に笑顔を見せれば――
「先生にお客さんだよ」
「私に？」
「うん！　あのお爺ちゃん」
「？　お爺ちゃん？」
――凍る。
その娘が指差した先に佇む――
「やぁ、久しぶりだねぇ……木山君」

「き……はら……先……生」

――悪夢を前に……

第五話――――交渉

「久しぶりだねぇ、木山君」
「どうして……」
消息不明だった。その筈だった老人が、今、自分の目の前に立っている。冬でも無いのに真っ黒なコートを来た大柄な男を二人連れて。その虚ろな瞳に不気味なモノを感じていると
「それにしても……モルモットと生活を共にするとは君も随分と酔狂な者だね。あぁ、それとも何かね？　また新たな研究でも始めているのかな？」
「っ！　貴方わ」
「だとしたら実に興味深いね。どうだい？　この子達の実験について少し話を「ふざけないで下さい！」ほう？」
彼は、何も変わっては居なかった。
あの悪夢の様な、子供達を使った人体実験を敢行したあの時のまま、何一つ変わっていない科学の狂信者。
「貴方と話す事など何もありません！　今直ぐ、ココから出て行ってください！」
その目には殺意すら見える。木山にとって、木原幻生は殺意に足る存在だ。今も尚、変わる事無く。
「やれやれ、久しぶりだと言うのにつれない話だな……まぁ良いだろう。私にも時間は惜しいからね。奴とは違って私の時間は有限だ」
「何を」
「用件を、済ませようじゃないか、木山君」
その顔は禍々しく歪めば

「渡して欲しいモノが有るんだよ、私に」
「？　貴方に渡すもモノなど何も無い」
「いやぁ、有るよ……君の研究成果」
その歪んだ口は、その目的を告げたのだった……
「幻想御手（レベルアッパー）だよ」

◇　◇　◇

「くそっ！　もう少しだぞ。死ぬんじゃねぇぞ最強！」
「ったく。準備しろよ小僧。正面玄関ギリギリに突っ込むからな、モタ付くなよ！」
「あぁ！　サンキュー！」
当麻と一方通行（アクセラレータ）を乗せたタクシーは正面ゲートの警備をノンストップで走り抜け、激しいブレーキ音を響かせて正面玄関に横付けしたのだった。
すかさず開いたドアから飛び出した当麻はフロアロビーに駆け込むや、病院中に届けと思い切り怒鳴り声を上げた。ただ一心に
「先生は居るかーー！　重傷の奴が居るんだ！　助けてくれーーー！」
バタバタと人が集まり、スタッフがタクシーから一方通行（アクセラレータ）を運び出していた。そんな中
「また君か。今度は一体なんの騒ぎだい？」
「っ！」

カエル顔の医師が当麻に歩み寄るが、運び困れる一方通行（アクセラレータ）を見て
「これは」と驚く。上条当麻と一方通行（アクセラレータ）。二人に面識は有るが、彼が彼を運び込むとは予想外の出来事だった。
思わず固まってしまうが
「おい先生！　コイツ、助けてくれよなっ」
「ん～？」
真剣な当麻に、思わず呆れてしまう。一体ぜんたい、彼は何を今更な事を言うのだろうか……それも
「誰に言ってるんだか……君は彼を生かして連れて来た。それだけで私には充分だね」
上条当麻に背を向け、冥土帰し（ヘヴンキャンセラー）は自分の戦場へと向うのだった。
「先生……」
当麻はその背に一度だけ頭を下げ、踵を返して病院を出る。自分にはこれから、やらなければならない事があったから。
そんな当麻が外に出てみれば
「こんな所で何をしているのですか？　とミサカは貴方の事情を把握していながら問い掛けます」
「！　お前」
ソコには――
「ミサカ妹」
「ミサカ２０００１号からの情報は断続的で要領を得ません。と、ミサカは現状への不満を貴方にぶつけてみます。貴方からの明確な説明を期待します、とミサカは貴方の目を真っ直ぐに見詰めて言います」

――上条当麻の守りたい者が在った。

◇　◇　◇

木原幻生の表情は楽しく歪んでいた。
「幻想御手（レベルアッパー）とは、君も大した着眼点を持ったものだね」
「何故貴方がソレを」
知っているのだろう。ずっと行方不明だった筈の男が。
「知っているともさ。複数の共感覚による脳波ネットワーク。数さえ揃えばあの樹形図（ツリーダイアグラム）の設計者にすら匹敵する代理演算装置。いや、実に魅力的な研究成果だね。もちろん……その副産物にも大いに興味は有る」
「……多才能力（マルチスキル）……いや、まさか」
「くくく……幻想猛獣（AIMバースト）、アレは実に興味深い。さて、渡してもらおうか？　木山く「ありません」？　無いとは？」
笑みを絶やさない木原に敢然と言い放つ。
幻想猛獣（AIMバースト）の危険性は誰よりも自分が分かっている。そしてこの目の前の人物は、およそソレを渡してはイケない科学者の中でも筆頭に位置するだろう。
「私が警備員（アンチスキル）に追われた時、既に全てのデータは消去されました。もうアレは存在しません、何処にも」
「ふむ。しかし他にも取って有ったのでは無いのかね？」
「いいえ。全ては消え去りました。ソレが事実です」
「そうか……」
少し俯く木原だったが、再び上げた顔は、より不吉な笑みをたたえている。
「駄目だねぇ、木山君……研究者足る者、常に不測の事態には備えておかなくては。万が一に備え、大事な研究データと言うモノは複

数のバックアップを取る。その基本は、決しておろそかにしてはイケナイな」
「違法な研究で多数のバックアップは命取りでしょう」
「ふむ、まぁソレも一理有るか……君はどう思うね？」
「？」
木原の言葉に疑問を持てば、控える大男に目配せしたのが分かった。瞬間、木山の脳裏に警鐘が鳴るが、「きゃあああああ！」と言う叫びと共に、ソレは間に合わなかった。

「何をするっ！」
「痛あぁい！　せんせーーーっ」

男はその巨体に似合わぬ動きで少し離れた所にいた女の子を掴み、木原の傍へと戻って来た。
先生、と泣きながら自分を呼ぶ子供に駆け寄ろうとするが、もう一人の男が道を塞ぐ。
他の子供達、とくに男の子達は、友達を助け様と男に向っていくが、男は無表情のまま子供達を蹴りつけ打ちのめし吹き飛ばしていた。
「その子を放せ！　子供達は関係無い！」
だが木原の笑顔はいっこうに揺らがない。彼は心底、科学以外の事には興味は無かった。
「無論承知しているよ。この娘は関係無いとね。だが……こうする事で君がデータの存在を思い出してくれるのでは無いかと期待してね。ちょっとした実験と言ったところだね」
「思い出すも何も無い。存在しないモノは渡し様が無いんだ」
「分かっているとも。君は立派な科学者であり私の優秀な教え子だ。君が嘘を付いているなど疑った事も無い……本当だよ」
ちらり。と視線を動かせば――
「痛い痛い痛ーーーいっ！　せんせーーーーーっ！」

男はその大きな腕で少女を地面に張り付かせ、その細腕を背中越しににじり上げた。間接を極められた少女は、地面に顔をこすりつけながらも泣き叫ぶが
「やめろーーーー！」
木山が押そうが揺らそうが、道を阻む男は微動だにしなかった。
「あぁ、この二人だがね。人間では無いんだよ、正確にはね」
「なんっ」
確かに、全く同じ顔に無機質な目。この二人からは生気と云ったモノが感じられない。
「ホムンクルスと言ってね。まぁその失敗作だが、我々で言った所の人造人間と言ったところかな。コチラの点では、我々の方が一歩進んでいるとも言えるな。君も知って居るだろうが、既に実用化に耐えるクローン体もこの都市には存在しているからね」
「……量産能力者計画（レディオノイズ）……」
「だからかな？　このホムンクルス達は命令は聞くが加減を知らない。私は軽く苦痛を与える程度で、君に対して充分過ぎる効果を期待出来ると踏んでいるのだが……些かやり過ぎてしまうかも知れんな。いや、まったく申し訳ないよ、木山君」
実に楽しそうに彼は笑う。酷く不快に、嘲笑う。
「さて、木山君。もう一度聞こう……幻想御手（レベルアッパー）のデータは？」
「……あんなモノを使って……一体如何しようと言うんだ。既に治療用プログラムだって学園都市に渡ってる。仮に貴方が改造してばら撒いたところで、拡散力場が集まる前に対処されてしまうだろう」
「ふむ。そうかも知れないねぇ……では無駄足だったか……な？」
ちらり、と見ればより一層の悲鳴が上がる。
「やめろーーー！　無いモノは無いんだ！　頼むからその娘を」
「ふむ。まぁそうだな……一本位は折っても問題ないだろう」
「っ！　痛っきゃあああああ」
一層、男は腕を捻り上げる。時、
「分かった！　分かりました！」

「ん？」
木山の声が一瞬、男と木原を止める。
「私が、もう一度プログラムを組みます。ね？　それで良いでしょう」
「……」
木原は無言で、だが顔の笑みは少し、狂気を薄くする。
「木原先生。冷静に、事態の収拾を図りましょう……私はアレを創りました。私の頭の中にはデータがあります。三――いえ、一日もあれば私はアレを作れます」
「……木山君」
「先生、私を信じて下さい。期待にはお応えします。ほら！　私はいつも先生の期待は裏切らなかったじゃありませんか。大丈夫です……こんな真似など、先生だって本意では無いでしょう」
「……ふむ。そうだな」
「木原先「折れ（やれ）」っ！　やめっ」
刹那、小さい筈のその音は、やけに大きく耳に届き――
――ボキン。と、響いた。
「あっぎっ！」と、呻き、少女はそのまま意識を失った。立ち上がった男の足元に転がる少女の腕は……曲がっていた。
決して、曲がらない、筈の角度に……
「ぅあああああああ！　貴様ぁあああ」

自分を難なく抑える男を無視し、木山は吼える。

「貴様ぁああ！」

「おやおや。気を失ってしまったじゃないか。可哀相に」

「殺す！　殺してやる！　木原幻生ーーー！」

その殺気も、木原にとっては心地良い。

「さて、データは何処かな？　木山君」

「無いと言ってるのか聞え無いのか貴様！　無い物は無いんだ！」

「ふむ、そうかね……今度は足だ」

振り向き男に告げる木原に「やめろーーーー！」と叫ぶ。

だが振り向くのは男ではなく木原だ。

「もう一度だ木山君。データは？」

「……信じて下さい先生。データはもう「折れ（やれ）」っ！」

気を失い横たわる少女の足に、男がその大きな拳を振り下ろした時――――

「っ渡しますっ！」

木山春生の声が大きく響いた。

男は拳を寸前で止め、木原は満足気に近付く。

「木山君？」

「……幻想御手（レベルアッパー）は渡します……渡しま、すから……もう、止めて……下さい」

崩れ落ちうな垂れる木山に

「データは？」

木原が促すと、木山は自分の携帯から一枚のメモリーチップを取

り出す。受け取った木原はポケットから端末を取り出しセットすると画面を見詰め

「ふむ。本物の様だね……ありがとう、木山君」

言って、男達と共に距離を取った。

霞んだ視界に横たわる自分の教え子が見える。地面を這う様に近付き、意識を失ったままの自分の生徒を抱き締めた。きつく、強く……

「ぅ……ぅうっ、ぐぅ……」

周囲に散らばる傷付いた子供達と共に、今はただ、泣きながら抱き締める事しか出来る事は無かった。

木原幻生は呻き声と泣き声の支配する施設を興味無さ下に見渡し

「ふむ。もうココには用は無いな。行くぞ」

二人を引き連れて歩き出した時、それは直ぐに止まる事になる。

「動くなっ！」

「ん？」

振り向けば、武装した警備員（アンチスキル）がずらりと並んでいる。そして気付けば自分は包囲されていた。その中心に居る人物は、施設の惨状に瞬間……頭の中が白くなった。そして……黄泉川の目に殺意が宿る。

「てめぇ……コレだけふざけた真似しておいて、五体満足で帰れるとは思ってないだろうじゃん？」
「思っているが？　それがどうかしたのかね？」
「あぁ、そうかい。ＯＫ、わかったじゃん……」
木原の顔には一ミリの後悔も動揺も無い。だったら、コチラももう何も必要ないだろう。

「……大人しくしろなんて言わないじゃんよ……」
「ほう？」

「精々抵抗しやがれ。思う存分……ぶっ殺してやるじゃんよ！」

警備員（アンチスキル）はその重火器の安全装置を、一斉に解除したのだった。二人のホムンクルスとの戦いが、今始まった。

◇　◇　◇

その戦場は静かだった。
音も、炎も、戦いの傷跡すらも無いほど、静かな戦場だった。

「おつかれ～、ヴィンセント～」
「ったく、楽しめそうだったのによ」
「……他愛なし」

三人の待つ車へと戻るヴィンセントには傷も、汗一つすらも無く、その背後・周囲には、天草式十字凄教の面々が倒れこんでいた。

皆、呻き、あえぎ、苦悶の表情を浮かべ、只の一人の例外も無く倒れ、只の一人の怪我人も無く打ちひしがれていた。
建宮すらも無傷で無力化したヴィンセント。その彼が車に戻り仲間への言葉を放つ、前に……事態は動いてた。

「……ターゲットはどうした？」

「え～？」
「あん？」
「む？」

ヴィンセントの言葉にアネイヤ達が振り返れば、何時の間にか車内からインデックスと打ち止め（ラストオーダー）の姿が忽然と消えていた。

「ふん……逃げた、か」

大した問題では無いと言いた気味に、ヴィンセントは呟いたのだった。

第六話――――戦闘

横たわる天草式の者達を尻目に、誰も居ない後部座席に目を向ける。

「まだそんなに遠くには行ってないんじゃな～い？」

「ガキの足だしな」

アネイアが面倒くさそうに車を降りスロウはどこか楽しげに笑みを零し目を瞑る。

「スロウ」

「あぁ……見つけた」

目を明ければソコには自信が漲っている。どうやら、もう禁書目録（クス）達（インデッ）を見付けた様だ。

「じゃ、さっさと連れて「っ！　スロウ！」へ？」

不破の叫びに呼応するかの様に凄まじい竜巻が自分達四人を囲む。ソレは自分達の身を守る風壁だった。見れば風壁に弾かれる斬激がある。壁の衝撃と切り裂かれた地面が斬激の威力を物語っていた。

その数、実に七本。

風を解き、地面に付いた傷の先に佇む人影に、ヴィンセント達が視線を送れば

「私の仲間が……随分と世話になりました」

長髪を大きく束ね、長大な刀を帯びた一人の女性が、視線も厳しく立っていたのだった。

「ほう……貴様が神裂火織……聖人か」

その目立つ容姿は聞いていた通りだし、実際、
「探す手間が省けた、か」ヴィンセントは彼女も探し出し捕らえる積りでいたのだから、コレは寧ろ好都合と言えた。
ヴィンセント達の気勢を感じ、その腰の唯閃に手を掛け
「確認します。イギリス清教を襲い、あの子をさらい、天草式を倒したのは、貴方達ですね」
「仕事なんでな」
「そうですか……でわっ！」
神裂の闘気が膨れ上がるのが分かる。確かに、彼女が強大な力を有しているのが分かる気勢だった。が、それだけに過ぎない。
一歩、前に出たのは不破だった。
「……殺すなよ」
「承知」
言って刀を抜く不破に「七閃っ」と神裂は極細のワイヤーを走らせる。その不規則で高速の斬激を――不破は難なくかわし神裂への間合いを詰めた。
「このっ！」
神裂はその腰の刀、七天七刀の柄を握り
「Ｓａｌｖａｒｅ０００（救われぬ者に救いの手を）！」
迫り来る不破に向け、その自らの聖人としての力を解放し唯閃を放った。だが――
――そこには何の感触も無く、刀はただ虚空を切り裂いた。
気が付けば、自分の顔のすぐ横に、不破の横顔が有る。
七閃をすり抜け、唯閃をあっさりと見切り、彼は自分を通り抜ける。
「才に奢らず研鑽を積むは称賛……だが引き時と攻め時を掴めぬは未熟」
「ば」

刹那、不破は神裂を通り過ぎ
「っかは！」
その肩口から大きく切り裂かれた神裂は血を噴出し倒れたのだった。

神裂の周りに集まる四人。
「殺すなと言ったはずだ」
「動きを封ずる為だ。止むを得ん」
「あ～ん。でもコレってやばくな～い」
「ったくよ。殺しても良いなら俺にヤラせろよ」
地面に血の池を作り出し、時折声を洩らしながら僅かに痙攣を見せる神裂を囲み、四人はその身体を眺めていたが

――聖人を連れて来てくれたまえ――
脳内に直接パラケルススの声が響く。
「構わんが、ソコまでもつか分からんぞ？」
「ちょ～っと不破ちゃんヤリ過ぎちゃったのよね～ん。男って女を見ると野獣だし～」
「お前の冗談は好かぬ」
「カカカ。ま、確かに美味しそうな女だけどな」
だがそんな会話など無かったかの様に

――その聖人に怪我など無い。頼んだぞ――
「「「「っ！」」」」
その意識が流れ込んだ時、気が付けば神裂は変わらずソコに横たわっていた。全くの無傷で、その場に静かに横たわっていた。
「いまさら、だな」
ヴィンセントは頭を切り替える。あの錬金術師が、全ての理を捻

じ曲げる事は既に承知の筈だ。今更、彼の力を知ったところで驚く必要も無い。彼がそう決めたのなら、怪我は無いのだろう。
「不破。アネイアと二人で目標を追え」
「承知」
「わっかり～」
言って駆け出す二人を眺め、「俺はどうするよ？」とスロウが笑う。
「依頼人（クライアント）を迎えに行ってやれ」
「はいはい。ったく、手を焼かせるジジイだぜ」
「言うな。アレでも依頼人（クライアント）だ」
「ＯＫＯＫっと」
言うや風を纏って舞い上がりスロウは飛び立った。
「ふぅ……子供達が暮らす都市……か」
どこか疲れた様に学園都市を眺めるヴィンセントは、その思考を振り落とす様に二・三回首を振り、眠る神裂を抱き上げる。
「悪いが、仕事なんでな」
眠る神裂に、ほんの少しの苦味を見せ、車に向うのだった。

◇　◇　◇

「撃（て）ーーー！」
黄泉川の声の下、二体のホムンクルスに向け一斉に銃撃が放たれる。その動きは巨体に似合わず俊敏だが、警備員（アンチスキル）もまた優秀な者達だ。その銃弾は確実に命中する。が
「ふむ。その程度の銃弾ではビクともせんとは……不完全とは言え中々の出来だな」
木原はその二体を興味深く観察している。まるで他人事の様に戦闘を眺めていた。
「あ～ん！　効きませんよーー！」

「泣き言なんか聞きたくないじゃんよ」
鉄装の弱音に返し、自分は装甲車の扉を開け中に手を伸ばす。そんな黄泉川の下に「危ないっ！」と鉄装の声が轟く。一体のホムンクルスが飛び掛かった。
「で？」
その宙に浮いているホムンクルスに、黄泉川は装甲車から取り出した対戦車ライフルの銃口を向けていた。その破壊力は一撃を持って、ホムンクルスの上半身を吹き飛ばしたのだった。
ジャコン。と弾を装填し直し、車のボンネットの上にスタンドを立てる。
「言っとくが、銃も効かない化物相手に、手加減の必要は無いじゃん？」
不敵に笑い、木原を睨む。
「くくく。いやいや、中々に面白い……さて、あと一体、上手く行くかね」
「ふん！　上等じゃんっ」
警備員（アンチスキル）とホムンクルスの戦いは、再び始まったのだった。

◇　◇　◇

「早く！　コッチだよ」
「わー、ってちょっと待って欲しいよってミサカはミサカはそんなに早く走れないよって言ってみる」
「急がないとあいつ等が追っかけて来るんだよ」
インデックスと打ち止め（ラストオーダー）は狭い路地を駆けていた。
打ち止め（ラストオーダー）の手を引いて、インデックスは出来るだけ目立たない道を走る。取り合えず車で追われる事は避けたい。
路地の先を曲がった時に「あっ！」と気が付いた時は遅かった。

ドンっとその見えた背中にインデックスがぶつかると、手を引いてた打ち止め（ラストオーダー）共々にその場に尻餅をついてしまう。

そんな彼女達に驚き

「ちょ！　どうかしたの？　貴女達」

「大丈夫ですか？」

地面に座るインデックスと打ち止（ラストオーダー）めに心配そうに声を掛けたのは、固法美偉と初春飾利。風紀委員（ジャッジメント）の腕章を腕にはめた、二人の能力者だった。

第七話――――追跡

「ほら、立ちなさい」
言って固法は打ち止め(ラストオーダー)の手を引き立ち上がらせる。
「こんな見通しの悪い路地、貴女達みたいな子供が通るものじゃないわ」
「小等部の生徒でしょうか？」
二人に注意を促す固法に声を掛ける初春だったが、その二人の腕章を見て「あーーー！」と打ち止め(ラストオーダー)は声を上げた。
「えっ！」
「な、なんですか？」
驚く二人に
「お姉さん達ってじゃっじめんと？　っとミサカはミサカは腕の帯を指差してみる」
「ん？　何んなのかな？　ソレ」
黄泉川と共に居る事である程度の知識がある打ち止め(ラストオーダー)の言葉にインデックスは疑問を放つが
「え～とね、う～ん……街のお巡りさんみたいなものかな？　ってミサカはミサカは何故か自信無さげに言ってみたり」
「あー、それは丁度良いかも」
二人の中では話が通じたらしい。だが固法と初春には意味が分からない。
「あ、貴女達何を言ってるの？」と聞くしか無いのだが、返る言葉に気持ちが引き締まる。
「私達追われてるんだよ」
「逃げてきたんだもん。ってミサカはミサカは一生懸命走ってみた」
見た所、子供としか見えない二人が逃げて追われていると言う言

葉は容認出来ないモノだ。
「逃げてきたって、誰から？　一体何があったの」
「アンチスキルに連絡し「ソレは勘弁してほし～な～」っ！」
　気が付けばインデックス達の後方に二人の人影が見える。アネイアと不破がソコには立っていた。
「貴女達は？」
　二人に注意を払いながら、インデックス達を自分の背後に回す。
「う～ん。お姉さん達ってその子達の保護者なのよね～。さ、一緒に帰りましょ～ね～」
「主は偽りを言う者を許さないんだよ」
「ばーってムーって連れてったくせにぃ！　ってミサカはミサカは怒ってみるっ」
　固法に並び立ち指差して声を上げる二人に「こう言ってますけど？」と警戒を強める固法。
「やれやれ。愛情って誤解されやすいモノよね～……せ～っかく痛い思いさせない様に配慮してるんだけどな～。ほ～んと、残念」
「っ！　貴女！」
　警戒のレベルを引き上げた固法の前で、アネイアは銃を出し彼女に銃口を向けていた。だが、固法が警戒する理由はインデックス達の言葉だけじゃない。今、目の前の女は無造作に右手を伸ばし、ソコには銃が握られていた。
「……空間転移能力者（テレポーター）」
「あら？」
　何故わかったのだろう？　と不思議な様子のアネイアだったが、固法は自信を持って口にした。
　自分は警戒した中で透視能力（クレアボイアンス）を使って二人を調べたのだ。男は腰に下げた刀の他にナイフを三本。だが、女の方は武器は所持してなかった。銃など絶対に無かったと言って良い。それが今、こうして銃を握っている。それはそのまま銃をその手に出現させたと云う事だ。

「任意の固定座標に転移させる……レベル3（スリー）、いえ4（フォー）？」
「ん？」
能力者と分かり初春も一層の警戒を示すが「ぷっ……あはははは」アネイアは急に笑い出した。一瞬で、場の空気が変わる。緊張感に、戸惑いが生まれてしまう。
「ご、ごめんなさいね～。も～、あんまり可愛いから如何しようかと思っちゃったわ～」
「貴女っ」
「だからゴ～メ～ン～」
踏み出す固法を銃口が制する。
「でもそうよね～、学生さんだもん、成績って大事よね～。でもね、お嬢さん？　社会に出てしまえば皆一緒よ」
「っ！」
固法だけじゃない。初春もまた止まってしまう。それ程、アネイアは優雅に微笑む。
「無能力者（レベル0）だろうが最高位（レベル5）だろうが、なんだったらレベル100（百）でも良いわね。だけど結局、使えない奴は使えないし、デキる奴はデキるのよね～。要は適材適所、まっ、結果が全てなのが社会ってものだし、何レベルの人間がどんな凄技でやろうが地道にやろうが、関係無いのが世の中なのよね～」
「それで？　銃を出して子供を連れ去る事が、貴女にとっての結果に繋がるとでも言うんですか」
だとしたら、どんな過程を踏んだとしても、決して許される結果では無いと思う。
「う～ん。まぁ確かにその通りなんだけど～、お姉さんとしては出来れば手荒な真似は避けたいのよね～。だから～……その子達、コッチに渡してちょうだいな？」
「断ります」
断固とした覚悟を瞳に宿し、固法は隙を伺う。どのタイミングで二人を逃がすか？　自分と相手の力量は？　今取れる最善の策は何

かと自分に問う。その思考を中断させる様に「それじゃあ、仕方ないかな～」アネイアはトリガーに掛かる指に力を入れるが

「あら？」瞬間、銃に二本の鉄矢が刺さっていた。

刺さっていると言うより、通していると言った方が良いのかもしれない。それは気が付いたらそうなっていた。そして

「そこまでですわ！」

背後から掛かる声に振り返れば

「風紀委員（ジャッジメント）ですの。誘拐未遂の現行犯で拘束させて頂きますわ」

「白井さんっ！」

固法の声に笑みを浮かべ、腕章に手を掛けた白井黒子がソコに立っていたのだった。自信満々な笑みを見せる黒子に対し、アネイアはやはり余裕の笑みを見せる。

「あらあら、ま～たお嬢さんね～。でも、誘拐未遂はひどいな～。チョッとした誤解よ？」

「おふざけにならないで下さいまし。事情は全て把握していますわ」

「ん～？」

何気に振り返れば初春が厳しい視線を向けている。そしてその手には通話状態の携帯電話。

「へ～。花飾りのお嬢ちゃん、やるじゃない」素直に感心を見せる。

「か、観念して下さいっ」

「そうね～」

少しだけ考える素振りを見せるが、ソレを見る三人には既に分かっている。目の前の女は、絶対に観念などしない事が。そして、ソレは直ぐに現実になる。

「うんっ！　じゃあ……こうしやおうかな～っと！」

言うや鉄矢の刺さった銃を黒子めがけて投げ放つ。同時にもう一つ、銃を出現させる。

「無駄な事を」

銃がぶつかる刹那、黒子の姿はスッと消える。時同じく、アネイアは自分の斜め後方の空目掛け、一発の弾丸を発射した。

「えっ！」

固法が驚きの声を上げた先で、黒子は地面へと落下していた。その腹部を血で染めながら。

「あらら～？　思ったより当たり所悪かったかな～」

「ぐっ！　……貴女、どうし」

「ふふふ」

黒子はアネイアの死角にテレポートした。筈だった。だがアネイアはまるでその場所が分かっていたかの様に銃を撃った。始めから、転移直後の黒子を狙っていたかの様に。

「白井さんっ！」

叫ぶ初春の声を機に、場の空気が変わったと直感した固法は

「初春さんっ！　二人を連れて逃げてっ！」

「えっ！　でも白井さんがっ！」

「良いから早！　しまっ！」

叫ぶ固法は先程まで沈黙を保っていた連れの男が踏み出したのを見た。が、次の瞬間には一気に間合いを詰められていた。

不破はその刀の柄を握り、肉薄した固法のみぞおちに突き入れれば

「がっ！」

固法の意識は一瞬で刈り取られた。

「いや～ん。不破ちゃんってば優し～んだから～」

「強者と剣交えるは至福……弱者に振るう刃は持たぬ」

「ふ～ん……どこのお侍さんだ～っての～」

倒れる黒子と固法を他所にアネイアと話をして「しっかりしてっ！　てミサカはミサっ」固法に駆け寄る打ち止（ラストオーダー）めに、不破は手刀を当て意識を奪う。

意識の無い打ち止め(ラストオーダー)を小脇に抱え不破が立ち上がれば、二人の視線は初春と、その傍に控えるインデックスに向けられる。
「さ〜て、その子もコッチに渡して欲しいな〜」
不破に並び立つアネイアに、後ろ手にインデックスを制しながらゆっくりと下がる初春。
目の前で黒子と固法を無力化された。こと戦闘に関して、自分は二人に大きく劣る事は誰よりも自分が理解している。今、自分に出来る事を考えた。

女の子を取り返す？　無理だ。固法をあっさり倒した男に自分が勝てる可能性は無い。
黒子と固法を？　もっと無理だろう。
残された女の子と逃げる？　だがもう一人の子は？　黒子と固法を置いていくのか？

決めかねる選択の中、一歩、アネイアが踏み出した時、決断がなされた。白井黒子は、激痛の中で決断した。

「っ！」
「ちっ」

不破とアネイア、両方が身を固めた時、二人の目の前に閃光手榴弾(スタングレネード)が出現した。黒子が、僅かな意識の中でテレポートさせた物だった。
「こっちっ！」
「え？」
瞬間、初春はインデックスの手を引いて後ろに走り出し、その背後で激しい爆音と閃光が巻き起こる。
少しの備えは出来たものの、それでも人の身体のどうしようも無い部分での感覚の狂いは生じる。僅かな時間では有るが、不破とア

ネイアはその動きを止められてしまう。感覚を取り戻した時には、既に初春とインデックスの姿は無かった。
「ふ……ふふ……お生……憎様、ですわ、　ね　」
黒子はその意識を手放し横たわる。そんな黒子に「や～ってくれたわ～……ったく」銃口を向け躊躇わず、タァン！　と引き金を引いたアネイアだったが
キィィン！　と不破は銃弾を斬り銃弾は黒子には当たらない。
「ちょ、不破ちゃん？」
「無益な殺生は好まん」
「ぶ～。な～によ～」
剣を鞘に収める不破に不満を洩らすが、それでも彼女も気にはしない。実際、仲間と言い争ってまで殺したい程でも無いのは確かだった。ちょっとしたはずみでしかないのだから。
「一人は確保した。ヴィンセントもそろそろ来るだろう……捕獲場所で合流としよう」
「オッケ～。んじゃ、そう言う事だから～、じゃあね～、お嬢さん達」
アネイアと不破が姿を消したその路地に、黒子と固法は、無言で横たわるだけだった。

◇　◇　◇

「くそっ、早く出ろよ」
上条当麻は一方通行（アクセラレータ）を病院に任せ、今はその外で御坂妹と共に居た。自分も詳しい事は分からない。だが誰かが現れ妹達（シスターズ）と関係があ

りそうな女の子とインデックスを攫ったと云う事は分かる。本来、妹達（シスターズ）には告げる積りは無かったが、聞けば記憶の共有が有る以上、女の子の事は彼女も知っている。そして当麻はその少女も妹達（シスターズ）の１人、２０００１号である事を知った。

事情は何も変わらない。寧ろ、一層に引けない事態へと移行したに過ぎない。

妹達（シスターズ）の関与が分かった時点で、当麻は美琴が関わってくる事を危惧したが、御坂妹は「既にお姉さまらしき磁場の移動が確認出来ます。と、ミサカは知り得た情報を報告します」との言葉に肩を落としたのだった。

相手は一方通行（アクセラレータ）に深手を与えた者達だ。当麻としては何としても美琴を止めたい。そして鳴らし続けたコールに

ピッ『なによっ』

やっと繋がったのは十五回を数えた頃だ。

「ビリビリ！　お前何やってんだよっ」

『あ～？　アンタに関係ないじゃない！』

「お前、アイツ等追ってるんだろ！　アイツ等、あの一方通行（アクセラレータ）にだって大怪我負わした奴等なんだぞ！　お前独りでどうしようってんだ」

『アタシはアンタに心配させる程弱くなんか無いわよ』

その声には、当麻に自分を過小評価された事への憤りがある。

御坂美琴は最高位（レベル5）の超電磁砲（レールガン）だ。ソレは事実であり、ソレは自信だ。ソレを、はっきりと上条当麻に突きつけたい。見せ付けたい。それは美琴の望みと言っても良いかも知れない。

『アイツ等の車なんてとっくに捕捉してるんだから！　アンタは黙って見てなさいよ』

「捕捉ってどうやって」

『はん。どうやってでも良いでしょ』

美琴は交通情報にハッキングし、道路上のカメラにアクセス。イ

ンデックスと打ち止め(ラストオーダー)を攫った車の追跡をしていたのだった。そしてソレは――

「ちょ！　おい！　だからってお前独りで行ったって『っ！　見付けたっ！　切るわ』って！　おいっ御坂っ！」

――もう戻れない程に、御坂美琴は近付いてしまっていた。

通話の切れた携帯を握り締めながら「くそっ！　あの馬鹿野郎！」当麻は自分の手が届かない事への憤りを覚える。だが

「一体あのビリビリは何処に居るんだっ！」

ソレすらも分からなければ話に成らない。そんな当麻にかけられたのは

「お姉さまの居場所でしたら、私にも分かりますが？　とミサカは貴方の知りたい事を知っている旨を発言します」と言う御坂妹の言葉だった。

「一体」

「先程の携帯電話の通話電波から位置情報を特定出来ました。と、ミサカは居場所の特定方法を告げます」

「何処だ！　教えてくれ」

これで繋がる。そう思った当麻に「ではミサカに付いて来て下さい。とミサカは走り出す準備をします」軽くステップを踏む御坂妹。

「おい！　お前は別に来なくても「いいえ。コレはミサカ達の問題ですから。と、ミサカは承諾しなければミサカだけで行く事を宣言しておきます」……おまっ！　……お前等」

ソコには１００３１号だけじゃない。他の妹達(シスターズ)七人も、その場に集まっていた。皆、同じ顔に、同じ決意を滲ませて。

ソコに打ち止め(ラストオーダー)が居て、御坂美琴(オリジナル)が居るのであれば、確かにコレは妹達(シスターズ)の問題と言って良いのかも知れない。だが、違う。それは―

―「違うぜ」確信し、顔を上げる。

「お前達の問題じゃない、これはもう俺達の問題なんだ。だから……行くぞ、一緒にっ！」

「貴方はそう言うと思いました。と、ミサカは何か口元が緩んでしまいながらも言います」

「いいから急ぐぞ！」

そして上条当麻と妹達（シスターズ）は病院の敷地をとび出したのだった。御坂美琴の向った、戦場へ向けて。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2249p/

とある魔術の禁書目録――異伝：『古の鍵』編

2011年1月6日02時10分発行